

**各 位**

2004年 12月 1日  
杏 林 製 薬 株 式 会 社  
東京都千代田区神田駿河台2 - 5  
(証券コード 4560 東証一部)

## 米国 ActivX Biosciences, Inc. の株式取得に関するお知らせ

杏林製薬株式会社(東京都 代表取締役社長;荻原郁夫)は、米国のバイオベンチャー企業である ActivX Biosciences, Inc.(カリフォルニア州 CEO:James A Schoeneck、以下「ActivX 社」)の全株式を取得することで、12月1日に ActivX 社と合意いたしました。今後は、ActivX 社を、新たに設立した杏林製薬(株)米国子会社(Kyorin Research, Inc.)に合併し、ActivX 社を存続会社として100%子会社とすることになります。

なお、本件の株式取得額は、総額 \$ 21MMとなりますが、当社の2005年3月期業績への影響は軽微なものと予想いたしております。

ActivX 社は、2000年8月に設立された最先端のプロテオミクス技術を有するバイオベンチャー企業で、優れたノウハウ、知識、技術を持つ研究陣のみならず、米国屈指の研究機関である The Scripps Research Institute から Scientific Advisory Board を迎えています。また、Activity Based Probe(ABP)を基本技術とする同社の高速蛋白解析手法は、蛋白活性を迅速に解析するものとして世界の大手製薬企業からも注目されております。

当社は、ActivX 社と2002年5月よりⅡ型糖尿病治療薬の候補化合物の探索研究に関する共同研究を開始し、期待通りのスピードでリード化合物の探索研究を推進することができ、開発候補化合物を見出しました。更に、2004年1月には代謝性疾患領域における化合物について作用機序解析の研究を委託し、同社の技術を用いることによりリード化合物の探索研究の効率化・スピードアップを図ってまいりました。

当社は、現在、生産性の高い創薬研究体制の構築を目指し「進化した世界的な創薬ネットワークの構築」「効率的なリード最適化研究の実施」「Proof of Concept(有効性と安全性の確認)までの創薬研究のスピードアップ」に取り組んでおります。この度の合意もその一貫であり、ActivX 社を100%子会社とすることが、ActivX 社の経営基盤の強化と当社の目指す生産性の高い創薬研究体制の構築、創薬力の向上に繋がるものと判断いたしました。

当社では、R&D領域を感染症、免疫・アレルギー、代謝性疾患の3領域に集中化しておりますが、今回、ActivX 社を傘下に入れることにより日・米・欧3極での創薬研究ネットワークの構築に至ることになります。今後はこれら3領域においてより効率的なシーズ探索が図られ、早期に有用な薬剤の創製に結びつくものと考えております。

—以上—

<お問い合わせ先>

杏林製薬株式会社 経営企画部  
TEL : 03 - 3293 - 3414  
FAX : 03 - 3293 - 3454

## < 参考資料 >

### アクティヴィックス バイオサイエンス社の概要

会社名：ActivX Biosciences, Inc.

代表者：James A. Schoeneck (CEO)

所在地：11025N.Torrey Pines Rd. La Jolla, CA 92037 (米国カリフォルニア州)

設立：2000年8月

従業員：約30名

事業内容：独自のプロテオミクス技術を用いた創薬ターゲットの探索と化合物の評価

### 用語解説

#### プロテオミクスとは

多くの病気の原因となる分子は遺伝子によって表現される蛋白質です。体には様々な細胞があり、その活動を支えるのも、違いを生み出すのも蛋白質です。この1つの細胞や組織において発現している全蛋白質を集合的にプロテオーム(proteome)と呼び、一般的に特定の細胞や組織で作られる全蛋白質を明らかにし、それらの働きや相互作用を分析することをプロテオミクス(proteomics)と言います。つまり、生体内の細胞や組織で作られる蛋白質の構造と機能を明らかにし、病気の仕組みや進行の管理、治療薬の効果などにおける蛋白質の役割を直接理解し、最終的には治療薬開発に役立てようという総合的研究がプロテオミクスです。

#### Activity Based Probe(ABP)とは

ABPは、ある種の酵素群においてその酵素が活性化している状態の時にのみ特異的に結合するようデザインされ、また検出可能な構造式を有している化学物質(プローブ)です。例えば阻害剤などが同時に存在する場合はこのプローブは結合しません。このプローブと細胞抽出液を反応させた後にその溶液を電気泳動や質量分析装置で解析することにより、活性化している酵素の同定を行うことが出来ます。この手法により、ある酵素に特異的な阻害剤のスクリーニングなどに有効に活用できる技術がABPであり、最大の特長は、複数の類似した酵素の活性状態を一度に検出することが可能なことから、高活性で選択性の高い候補化合物のスクリーニングを効率的に行うことが出来ることです。